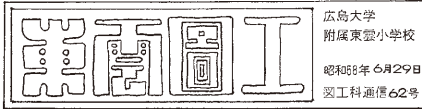


# れ

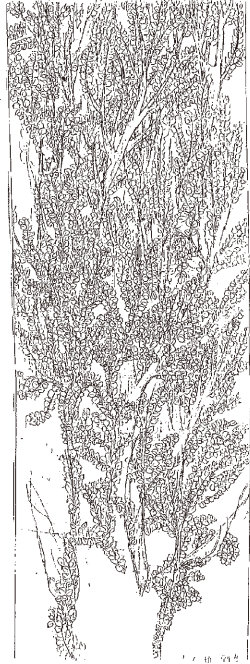
## 連携に 教科通信 対保護者

Keyword : 子ども, 保護者, 教師集団



62の1

広瀬 雅之 作品  
→  
(田ツ切の半紙)



※ ねばり強い紙

今春、土曜日(6/25)の午後3時30分、平素であれば学校のそばに子ども達の姿はあまり見あたらない遊園地です。ところが今日は、5年生の女子十数名が、保護者の方から図工室でズーツとボララの絵をやっています。黙々と(とはいっても多少のふしやバリエーションが)、画面の中に、無敵にあるともおもえざる葉っぱに着色をしているのです。右に掲載いたしました広瀬さんの絵を真参照下されば、Eやすぐ御理解いたされたものと感ずるのでは、まさに、彼自身の精神力の伸び、制作を支えていると言っても、決して言い過ぎではない程のすばらしい活動を展開しています。本人達にとってみれば、行きつくべきポイントをみずえての制作であさかゆえに、案外感懐きはないのでしょうが、アウトサイドからみている私にすれば、「よくまあ、こんなデザイン的な仕事は何時間継続できるものなせあー」とつくづく感嘆してしまいます。まったく、子どもの真摯な制作態度には頭がさびります。

度々、この「ボララをかこう」という授業、教壇前席に陣取りて以来すでに8回も超えてあります。きわめて細密な線画(右の広瀬さんの作品)を経て、次に繊細な着色へと移行しているのです。ともかく、もう一度言っておきますが、やむを得ない精神状態ではおこなうことのできないような活動なのです。

ところで、このた標置を設定した、ひとつの意図は、図工科の本館館から(前号参照)からみれば、若干のニュアンスの相違があります。『子ども達のじょうご取り紙本姿勢を待たう』というニギハキにあってわけです。つまり、現代の子ども達を总体としてみれば、一般に

\*\*\*\*\*

「ママがね、図工は入学試験に関係ないからあんまりがんばらなくてもええ言ったよ」とは、希望一杯、夢一杯、教師としての使命感に燃え、子どもたちの前に立った私へのT子ちゃんからの爆弾発言でした。初任時、図画工作科授業第一次第1時の私のデビュー授業での出来事です。

最前列のクリクリお目々のT子(3年生)ちゃんからのこの直球弾、「エッ！」と驚き、「あ、そうなの」と、平静を装うのが精一杯だったこと、その時のT子ちゃんのあどけない表情のことなど、いまでも脳裏に鮮明です。その夜、「よぉ～～～し！そうであればママがなんと言おうとT子ちゃんに図工大好きと言わせるぞ」と決心したことまでも覚えています。この原初体験がいまの私につながっていると思います。

ともあれそれから数年後、一念発起、上掲のような「教科通信」を保護者向けに発信することを思い立ちました。その際、何をどんなスタンスで発信していくべきか等を考える際、この“事件”はまさに原点的な出来事だったとなつかしくありがたく思い出しています。それほどのインパクトだったのです。

さて、この教科通信、全校の保護者数百名を対象に発信しました。各学級担任から子

